児童文学

最首悟

切札は「子どもへの畏れ」

透明なドームの中の子どもたち

★さいしゅ・さとる氏は東京大学助手・生物学専攻。著書に「生あるものは皆この海に染まり」、共著書に「水俣の啓示」「家族の現在など。一九三六(昭和11)年生。

二度とは関われない

小松左京の『首都消失』は、東京が十六号線に沿ってドーム型の雲にすっぽり覆われてしまう、全く音信不通の事態をその外側から書いてみせた。最外層はふつうの雲のように見えて、その実、数メートル入りこむと、ものすごいエネルギーではじかれてしまう。撃ちこんだピストルの弾はひしゃげて撥ねかえってくる。

読みながら、これが全く視界をさえぎっている雲でなくて、透明なドームだったらどうなるだろうと考えた。もちろん交通は遮断され、音信も依然として不通である。しかし航空機や偵察衛星から内部の様子を観ることができる。すると内側の人々はパニックに陥りながらも次第に落ちつき、新事態に適応しながら、日々の生活をおくり子どもが生れ老人は死んでいく様子がわかった。

不思議なことに外側から透明に見えるドームは内側からは不透明であるらしく、あるいは他の理由からか、内側の人々は外へ向っての手振りなどによる意志伝達をまるっきりしなかった。まあこんな設定をして、そして『首都消失』は雲がはれていくところで終って別に落ちはないのだが、ここでは落ちをつけることにしよう。透明なドームがなくなっていることに気付いて、人々は観喜の念に満ちてどっと首都に繰りこんだが、話が通じないことにがく然とし、その内考えが丸っきり違うことに気付いて茫然としてしまった。

透明な壁は外部から見ているかぎり、自分たちの世界と同じように内部の世界も展開していると思わせるような何らかの変調装置、モジュレータが組みこまれていたのである。

何かの情報が伝わってくるときに変調、変換されてしまう透明な壁の存在というのは、考えていくとたいへん怖ろしい。

子どもとはそのような壁の向う側にいる存在である。なんだか唐突なので、もう一回状況を設定し直そう。

子どもはモジュレータつきの透明な壁によって大人から隔てられている。お互いが見えているし、意志の疎通もはかれる。ただし大人は決して壁の向う側には行けない。子どもは成長すると壁をつき抜けてこちら側にやってくる。つき抜けたとたんにもうもどれない。各人にとって一生に一回かぎりの一方通行路がある時開かれるのである。向う側からやって来たばかりの若者から、大人たちは、透明な壁には何か変調装置がついていて、自分たちが壁を通して理解している子どもは、真の子どもとどうも違うのではないかという感触を得るのである。しかし若者は見る間に変態を遂げてしまい、壁の向うに居たときの記憶をなくしてしまう。子どもたち。私もかってそこから出てきたのに、その世界へは二度とふたたび関わることができない。

透明なドームの中の子どもたちは育って次から次に壁をぬけてやってきて、「子どもとは…」というある種の驚きの感触を大人に与え続けるけれど、その感触は確かな子どもの実像に結像することは決してないのである。

モジュレータを意識

私が児童文学及びその周辺領域に関心をもつのは、いわばそういう二度と関われないことのため息のせいなのだ。そして関心は二方向に分岐する。一つは、作者たちがどのような子ども像あるいは子ども観をもっているのかという興味。一つは私のような子ども観をもっている作者が感触と創造力でどのような子ども像を作りあげてくれるのかという期待である。作者を選び分けながら、さもありそうな子どもを求めて児童文学を読む。

だから別に児童文学を一生懸命読むわけでもないし、児童文学はかくあれなどという気持を起したこともない。ほんとうは、きわめてありそうな子どもも、真の子どもも頭から追い出してしまうにかぎると思っている。だってそこらへんに子どもらしい子どもがいくらでもいるではないか。何も思わずにそういう子どもを可愛いがったりしていればいいのだ。

どころが重いほうのダウン症児を子どもにもって、どうもそういうわけには行かなくなった。どうやらドームの中から出て来そうにないし、直感的に子どもらしい子どもと思っている子どもとただいぶ違うから、この子に限ってモジュレータは働かないんじゃないかなどと思って、そしてそう思ってしまったらもう、直感的に子どもらしいと思っていた子どもはどのようにモジュレータが働いているか知れたものでないという疑問にからめられるのである。

というわけでこの十年子どものことが気にかかる。というより大人の子どもへの関わりが気になる。さらに言えば、子どものことをわかったつもりの大人たちの子どもたちへのちょっかいが心配なのである。その結果臆面もなくこういう紙面に登場する仕儀となる。これからしばらく書いていくわけだが、抱えている切札は一枚っきり、「子どもへの畏れ」という単純なものだから、先は見えているようなものだ。

このところしばらく新版『子どもの本の学校』(日本子どもの本研究会編、ほるぷ出版・五五〇〇円、一九八六・十一月)という厚い本をひっくりかえしひっくりかえししてきた。やっぱり「なぜ子どもの本をかくか」(第二章)に興味がある。三四人の作家が答えているが、なかで、いぬいとみこが「幼年時代というものは、遠視用の目がねをかけて、初めて焦点があい、見えてくるのかもしれない」といっている。モジュレータが意識されている。